

星に願いを ケン・ペプロフスキー・カルテット

【DISC：1】

- グッド・モーニング・ハートエイク**〈テナー・サクソ編〉（6：42）
- グッド・モーニング・ハートエイク**〈クラリネット編〉（7：09）
- Good Morning Heartache** 〈I.Higginbotham , E. Drake, D. Fisher〉
- いそしぎ**〈テナー・サクソ編〉（5：26）
- いそしぎ**〈クラリネット編〉（5：45）
- The Shadow Of Your Smile** 〈J. Mandel〉
- イン・ザ・ウィ・スモール・アワーズ**〈テナー・サクソ編〉（5：11）
- イン・ザ・ウィ・スモール・アワーズ**〈クラリネット編〉（3：19）
- In The Wee Small Hours** 〈D. Mann〉

- クライ・ミー・ア・リバー**〈テナー・サクソ編〉（7：42）
- クライ・ミー・ア・リバー**〈クラリネット編〉（7：07）
- Cry Me A River** 〈A. Hamilton〉
- 愛は海よりも深し**〈テナー・サクソ編〉（6：08）
- 愛は海よりも深し**〈クラリネット編〉（6：57）
- How Deep Is The Ocean?** 〈I. Berlin〉

【DISC：2】

- 月に願いを**〈テナー・サクソ編〉（6：55）
- 月に願いを**〈クラリネット編〉（5：58）
- I Wished On The Moon** 〈R. Rainer〉
- アイ・シュッド・ケア**〈テナー・サクソ編〉（5：27）
- アイ・シュッド・ケア**〈クラリネット編〉（5：02）
- I Should Care** 〈S.Cahn, A. Stordahl, P.Weston〉
- 5. ラッキー・トゥ・ビー・ミー**〈テナー・サクソ編〉（6：59）
- ラッキー・トゥ・ビー・ミー**〈クラリネット編〉（7：19）
- Lucky To Be Me** 〈L. Bernstein〉
- 7. ジンガロ**〈テナー・サクソ編〉（4：57）
- ジンガロ**〈クラリネット編〉（3：31）
- Zingaro** 〈A. C. Jobim〉
- 星に願いを**〈テナー・サクソ編〉（5：23）
- 星に願いを**〈クラリネット編〉（7：21）
- When You Wish Upon A Star** 〈L. Harline〉

ケン・ペプロフスキー - tenor sax & clarinet

テッド・ローゼンタール - piano

ゲイリー・マッツァロピッ - bass

ジェフ・ブリリンガー - drums

*

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan
Recorded at The Studio in N.Y. on August 15 & 16, 2006
Engineered by Katherine Miller
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound：
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Front Cover：© Irina Ionesco / G. I. P.Tokyo
Artist Photos by Mary Jane Photography
Designed by Taz

バラードとして演奏しているが、クラリネット・ヴァージョンでは、テンポを上げ、スインギーなスイング・ナンバーとして演奏し、クラリネットの持ち味を存分に生かしているのである。おみごとといわざるを得ないのである。ほんとうに一曲を2度楽しめるのである。

演奏はバラードが中心だが、バラードだけではない。ほくがこの2枚組の中で、とくに好きで、くり返し聴いた一曲に「ラッキー・トゥ・ビー・ミー」がある。レナード・バースタインがミュージカル「オン・ザ・タウン」のために書いた曲で、

同じ曲をテナーとクラリネットで吹き分けるケン・ペプロフスキーの傑作誕生。ケン・ペプロフスキーは以前クラリネット奏者としてCDで時々聴いていたが、ヴィーナス・レコードの『メモリーズ・オブ・ユー』を聴いて、すてきなテナー・サクソ奏者でもあることを知り、惚れ直したのだった。彼からテナー・サクソの妙技を引き出してみせたヴィーナス・レコードのプロデューサーでもある原哲夫氏の慧眼には感服してしまった。彼のテナーはとても味わい深い。温かく太い音でよく歌っており、表情に富み、まるで画家のようにさまざまな風景を描いてくれるのである。もし彼がクラリネットだけしか吹かなかったら、こんなに惚れ込んだりはしなかったと思う。いまやテナー奏者として、エリック・アレキサンダーやグラント・スチュアートに匹敵する魅力ある存在だと思う。テナー・サクソ奏者として、いまやかけがえのない存在である上に、さらにクラリネットもみごとに吹いてみせるのだから、いうことなしである。

クラリネット奏者としても、彼はいまもっともすぐれた一人だと、ぼくは思う。スイング時代と違って、モダン・ジャズの時代になってからは、クラリネット吹きは少なくなったが、ペプロフスキーの、これまたテナー同様に温かく、人間の起伏に富む表情を表現した彼のクラリネットを聴くと、クラリネットの魅力を再発見するのである。テナーとクラリネットでは同じリード楽器でも音色も音域も異なるが、ペプロフスキーはまるで二つの異なる人格を演じ分ける役者のように、吹き分けてみせる。エボニーでできたクラリネットの音は、とすればクールな印象を与えがちなのだが、ペプロフスキーのブレイは人間の血が通った温かさが感じられて、ぼくは大好きだ。また、ベニー・グッドマン、アーティ・ショウ、トニー・スコット、パディ・デフランコといったこれまでのクラリネット奏者たちとは違った音色とスタイルをもっており、独自の世界をもっている。

テナーとクラリネットを同等のすばらしさで吹き分けたプレイヤーはこれまでもいなかったのではなかろうか。エディ・ダニエルズはかつてテナー奏者だったが、クラリネット奏者となつてからは、ほとんどクラリネットに専念しているかのように思える。ケン・ペプロフスキーほど、テナーとクラリネットという二つの楽器を完全に両立させているプレイヤーは他に見当たらない。

そこで、今回の同じ曲をテナーとクラリネットで吹き分ける企画が生まれたのであり、それがまたみごとに成功しているから驚かざるを得ない。

ケン・ペプロフスキーはどちらの楽器を吹いても、バラードの得意なプレイヤーであり、バラードをまるで歌のように聴かせてくれるあたり、心憎いかぎりだ。まるでブレイの後から歌の歌詞が聴こえてくるような演奏なのだ。

今回は前作『メモリー・オブ・ユー』に次ぐヴィーナスでの第二弾だが、ぜいたくにも2枚組であり、ペプロフスキーのテナーとクラリネットを堪能することができる。そして演奏曲のうち、「ジンガロ」以外はすべてよく知られたスタンダード・ナンバーであり、ちょっとしたジャズ・ファンなら口ずさめるような有名な曲ばかりである。もし、歌詞カードでも見つければ、その英詞や日本語訳を見ながら聴きたいものだ。そうすれば、ペプロフスキーのブレイはさらに心の琴線に触れるものになるだろう。また、彼のブレイに合わせて、歌詞と一緒に歌ってみたくなるかもしれない。

ペプロフスキーの演奏は、テナーの場合もクラリネットの場合も、ゆつたりと落ち着きはらっていて、せっかちなどころがない。この態々追らざる姿勢こそがジャズである。そして、聴いているうちに、いつの間にか、ニューヨークのジャズ・クラブで、くつろいでジャズを聴いている気分になるからふしぎだ。こういう演奏だと飲む酒もうまくなってくるというものだ。

また、ペプロフスキーのすごいところは、テナーとクラリネットを、まったく異なる性格の楽器として吹き分けている点だ。よく、アルト奏者がクラリネットを吹くと、音色やフレーズにもアルト・サクソ的なものがみられるが、ペプロフスキーは、テナーのブレイにはクラリネットの影はまったく感じられないし、クラリネット・ブレイには、彼のテナー・スタイルは聴こえてこない。だから、同じ曲を二つの楽器で吹き分けても、少しもダブらないのだ。そのため、とても楽しく聴けるのである。たとえば、「愛は海よりも深し」では、テナーのブレイではゆつたりした

哀愁もあって好きなナンバーだが、ここでのケン・ペプロフスキーの自然なスイング感がたまらない。じっとしていられないくらい気持ちよく躍動していて、なんともしあわせな気分になれるのだ。日本のミュージシャンにもこのように自然にスイングする演奏をやってもらいたいものだ。そうすれば、ジャズ・クラブに出かける楽しみが、もっと大きくなるであろう。

共演のリズム・セクションは前作の『メモリーズ・オブ・ユー』と同じで、テッド・ローゼンタール (p)、ゲイリー・マッツァロピ (b)、ジェフ・ブリリンガー (ds) が、またよく自分の役割を心得ていて、主役を押しつけて出しゃばることがなく、ベースも最小限のソロしか取らないし、ドラムもバックアップにつとめ、変に自己主張しないつつましがが好ましい。「ラッキー・トゥ・ビー・ミー」でピアノのテッドは、テナー・ヴァージョンではちょっとエロール・ガーナー風のイントロを弾き、これにのってテナーが気持ちよく入ってくるあたりも、とても粋であり、このスインギーなナンバーではピアノもベースも落ち着いたソロを聴かせるが、全体に溶け込んでいて気持ちがいい。

この曲のクラリネット・ヴァージョンでは、全体に少し軽やかさを加えて、クラリネット向きに小粋にスイングしてみせるあたり、ペプロフスキーも心得たものであり、同じ曲でもみごとな場面転換をみせていて、その自己演出ぶりに感心してしまう。クラリネットという楽器はとくに音色の魅力が大切だが、ペプロフスキーは明るい輝かしいクリアな音色の生かし方が巧みであり、クラリネット吹きとしての道をきわめていることがわかる。そして、このクラリネット・ヴァージョンでは、テナーのときのピアノとの対話とは異なり、ベースとのインターブレイを中心にし、ドラムスの短いソロをはさみ、テナー・ヴァージョンと構成をうまく変えている。

テナー版とクラリネット版の違いについては、「ラッキー・トゥ・ビー・ミー」を聴けば、ペプロフスキーの変化のうまさが分かって興味深い。彼の巧みな変化をつけたブレイで、同一曲をテナーとクラリネットで聴く面白さをみごとに成立させたのだ。そして、このアルバムの選曲もいい。ほくは文句なしに楽しむことができた。好きな曲が次々に現れるのでうれしくなってしまった。

「グッド・モーニング・ハートエイク」は、ビリー・ホリデイの歌でよく聴いたトーチ・ソング（失恋や片想いの歌）で、もの哀しさが、ペプロフスキーのブレイで十分に味わえた。

「いそしぎ」はジョニー・マンデルの佳曲で、いつかテナーでじっくり聴きたいと思っていた曲だった。

「イン・ザ・ウィ・スモール・アワーズ」はよく歌で聴く曲だが、テナーとクラリネットでまるで歌を聴いているような気分させてくれる。

「クライ・ミー・ア・リバー」はジュリー・ロンドンの歌でよく聴いたが、最近器楽奏者もよく取り上げるようになったが、ケンが吹くと、なるほどなかなかの名曲であると納得がいく。

「愛は海より深し」はスイング・ミュージシャンのブレイで親しんだが、ペプロフスキーが演奏すると、新鮮な曲として聴ってきたので驚いた。アーヴィング・バーリンが1932年に作曲した古い曲である。

また、このアルバムには2曲、天体に願いをかけたナンバーが取り上げられている。「月に願いを」と「星に願いを」である。前者「アイ・ウィッシュド・オン・ザ・ムーン」はビリー・ホリデイも歌っており、彼女の伝記のタイトルにも用いられていた。ビリーは月にまつわる曲が好きで「ブルー・ムーン」などいくつか歌っていたが、月は時に淋しさを感じさせることもあり、ビリーの心情に合っていたのかもしれない。

後者「星に願いを」のほうが有名で、ディズニー映画「ピノキオ」の主題歌であり、夢見るような美しいメロディはほくも大好きで、この曲が入っていると、そのCDをつい買ってしまいが、とくに女性プレイヤーが好んで演奏することが多いようだ。ケン・ペプロフスキーはこの曲をラスト・ナンバーに選び、ゆつたりとしたテンポで歌い上げ、原メロディの魅力を活かすように上げていく。テナー・サクソとクラリネットで、2曲この曲を聴くと、この曲好きのほくなども、すっかり満足感で満たされるのであった。

岩浪洋三